

令和7年度 兵庫県立加古川西高等学校 各部・学年の総括

	本年度の目標	目標実現のための具体的な取り組み	自己評価 A:できている B:少しできている C:あまりできていない D:できていない	今年度の振り返り (各目標に対する評価に対して、その成果・課題)	次年度に向けた改善策
総務企画部	【重点目標】 学校行事の効率的な準備と運営	各学年や他の部署と連携を図り、スムーズに行事が進むようにする。 長期的展望に立って、81回生修学旅行を決定する。	A	学校行事に関しては、他の分掌・学年と連携をとりながら進められた。また、行事検討についても、多様な意見を取り入れながら、計画を進めていくことができた。特に、81回生の修学旅行について、プレゼンを実施して業者を決定できた。81回生の野外活動について、業者の廃業の影響で混乱したが、無事に決定することができた。	今年度の振り返りを踏まえ、次年度もさらにスムーズな行事計画、運営を目指していきたい。そのためには、常にすべての部署との連携を念頭に進めていかなければならない。また、沖繩修学旅行の下見計画を立てていく。
	自然災害への対応 不審者への対応	対応マニュアルを再点検して改善する。	B	今年度も、マニュアルの再度の確認を行った。避難訓練では、加古川消防署の支援を受けながら実施できた。そこで警報機器の不備が確認できてよかった。た。防災避難訓練では、生徒指導部保健係と協力して、災害弱者の対応について実施する。	防災については、予想される南海地震時の対応について、教科の指導と連携しながら、さらに深化させていく必要がある。生徒が正常性バイアスに惑わされずに行動できるように指導する。
	人権教育の推進	本校の教育目標である、『生命の尊厳、自然への畏敬の念、他人を思いやる心や感動する心』を養い、知・徳・体の調和のとれた豊かな人間性を育成することの根幹をなすものとして人権教育は非常に重要であり、従前より熱心に取り組んできた。 本年度は、「確かな人権意識を身につけ、差別なき社会の形成に積極的、意欲的に貢献できる人間を育成する。」ことを人権教育の重点目標とする。	B	本年度も、1年が様々な人権問題について、2年が同和問題について、3年が就職差別等について取り組み、生徒の人権意識を高めることができた。また、指導することが教師の研修にもなり、指導力が向上している。 県の研修会で得られた内容や東播磨地区人権教育研究協議会での取組の内容を、次年度に活動に生かしたい。	各学年で計画された人権教育活動をさらに進めるとともに、LGBTQやヤングケアラー問題についての取組を行っていく。近年、多様な特性を持つ生徒が増加しており、生徒指導部や学年と情報共有し、実態の把握に努める。
	図書室の環境整備	新刊を取りやすい場所に配置したり書架を整理する。東播地区の読書感想文コンクールへの応募や「貸出図書」の実施により、本に親しむ機会を設ける。	B	新刊の案内は、「図書だより」を通じて各クラスに掲示している。今年度は、1・2年生対象の希望者のみで、「読書感想文コンクール」へ応募した。播磨東支部コンクールでは、1名入選した。昨年度に引き続き、「蔵書整理」や「貸出図書」を行った。「貸出図書」は、各クラスの図書委員が選んだ本を教室前に置き、本に親しむきっかけづくりとした。	家庭学習や部活動等で、読書時間の確保が難しい環境にある生徒が多い。図書委員会活動を通じて、少しでも本に親しむ時間が持てるような取り組みを考えていきたい。
	管理職、各学年、各学部との連絡調整をしながら、新しい企画提案	各学年の要望を聞きながら、全校生に向けた講演会の実施。	C	今年度は学校行事に関する新しい提案ができなかった。全校生を対象とした講演会なども実施できなかった。	次年度は、生徒に生き方について考える機会となるような講演会を実施する。また、加古川西の魅力を高めるための企画を実施する。
	「総合的な探究の時間」の充実と学年間の調整、連携を図る。	各学年の年間計画を立て、それに基づいて3年間の計画を立案し、担当者への研修を実施する。	C	3年間の実施内容が定着し、安定して実施できるようになってきた。一方で学年担当者にはかなり負担になっていた。また、コンピュータ端末を3学年同時につなぐことができないことが多くあり、時間を無駄にした。	学年間との連絡調整をより密にする。加古川西校の探究の型を定着してきたので、より発展した探究活動が出来るようにしていく。また、学年・教員・生徒が取り組みやすくしていく。
	特色類型の受験者数増加の対策を検討する。 今後に向けて、特色類型の教育活動を再検討をする。	特色類型の教育内容の再検討と広報活動をおこなう。	C	ここ数年受験者数は一定していたが、今年度は36名と定員割れした。オープンハイ等では、特色に手ごたえはよかったが、残念な結果になった。県内の国際系が、受験者数を減らしているため、長期的な視点で考えなければいけない。	令和8年度は定員割れしたので、特色類型に関する広報活動をさらに強化する。可能であれば、特色類型に特化したオープンハイスクールの開催も検討する。また、今後の特色類型の在り方について長期的な視点で議論する場を設ける。
	地域や中学校に、加古川西高校をより深く理解してもらうための広報活動	中学校訪問の実施や夏、秋オープンハイスクールの実施	B	春・秋に中学校訪問を実施した。中学校の教員からは本校への理解が高く、中学生およびその保護者からの評判も良好である。また、夏・秋に実施したオープンハイスクールについては、アンケート結果から内容は充実しており、概ね好評であったと考えている。	中学生への直接的な広報の機会をさらに拡充していく。時期が許せば、中学1・2年生を対象としたオープンハイスクールも検討してみる。昨年度から実施しているような、中学生の文化祭への来場を促進し、参加者を増やすことを目指す。また、塾など新たな広報の場を開拓することも検討する。
教務部	教育課程を検証する	教育課程検証し、改善を図る。また、類型の在り方を検討する。	B	DXハイスクールに指定され、「情報Ⅱ」などの科目を教育課程に追加するなど、「育てたい生徒像」の観点から改善を図った。さらに改善に努めたい。	選択科目が多岐にわたっているため、授業展開が複雑になっている。「類型の在り方」を検討していきたい。
	【重点目標】 観点別評価の適正化をはかる	各教科の評価法を共有し、教科の独自性を保ちながらその評価方法を検証し、学校としての評価の在り方を考える。	C	「観点別評価」の検討がまだまだ不十分である。各学期ごとに集計し、その結果を各教科に提示しているため、それを利用して改善していく必要がある。	現在実施している評価方法と、違った視点からの評価を比較し、教科の特性を活かしつつ、検討を続けていく。
	教育の情報化をはかる	ICTを活用し、「教員⇄生徒」双方向の授業実践。校務支援システムの有効活用。	B	かなりの部分でICTを利用した授業や情報の共有化ができてきていると考える。教師個人から全体への普及がこれからの課題である。	積極的にICTを利用した「研究授業」を実施し、教科を横断して学ぶ姿勢を構築したい。
	研修の充実	BYOD、記述式採点ソフト、校務支援システムなど、有効利用できるような研修を計画する	A	「記述式採点ソフト」が新しくなり、教師間で教え合いながら互いの技能習得を図った。現在ではほぼすべての教員が有効活用している。	一人の教員に頼るのではなく、互いに教え合うことによって、多くの教育がICT等の技術を共有できるようにしたい。

令和7年度 兵庫県立加古川西高等学校 各部・学年の総括

	本年度の目標	目標実現のための具体的な取り組み	自己評価 A:できている B:少しできている C:あまりできていない D:できていない	今年度の振り返り (各目標に対する評価に対して、その成果・課題)	次年度に向けた改善策
生徒指導部	【重点目標】 基本的な生活習慣の確立	校門でのあいさつ運動。教師側からの積極的な挨拶を心掛け、自然に挨拶ができるようにする。スマホ等の使用マナーの徹底と、タブレットを含む貴重品等の自己管理を徹底する。	A	「あいさつ渦巻く学校」を目標として掲げ、毎日がオープンハウススクールであるという意識をもって学校生活を送ることの大切さを、全校集会等を通じて意識させることができた。正門・通用門でのあいさつ運動は、生徒会役員とともに風紀委員も参加したことで、本校の校風構築に役立っていると考えている。	基本的な生活習慣は、普段からの声掛けと自らが改善しよう意識しなければ育たない。社会のリーダーとなるには、規範意識の徹底と相手の立場になって考えて行動する「共生の心の醸成」が必要となる。コロナ禍より欠席・遅刻が増加傾向にあるが、質実ともに本来あるべき教育環境を再構築し、学ぶ喜びを実感しながら、鍛えのある高校生活ができる環境を目指す。
	交通マナーの向上と交通事故防止	交通安全教室を通じて、生徒の交通マナーの向上と交通事故防止。特に自転車通学についての安全意識の向上。	A	例年と比較し、交通事故件数は減少傾向にある。大事に至らなかったのは偶然と考え、命の大切さについて向き合う機会が必要ではないかと考える。3学期に入り、苦情電話を受けることがなくなったが、新年度の道路交通法改正に伴う指導の徹底を行う。	帰りのSHRがなくなったために、「気をつけて帰ることを伝える機会がなくなった。最後の授業担当者や部活動顧問が、帰宅の際には声をかけることも事故防止に役立つ。生徒に事故を起こさせないという教員の強い意識が必要と考える。
	多様化する生徒への柔軟な指導	個々の状況を把握し、部会等を通じて対応策を協議する。いじめを見逃さないために、アンケート実施と個人面談を通じて学年との連携を密にする。	A	各考査ごとに「いじめに関するアンケート」を実施。記名式と無記名式(記名でも可)を交互に行い、生徒からの情報収集の機会を設けた。また長期休業中の「連絡・相談システム」も十分に活用でき、管理職・学年・生徒指導部と連携し、情報共有することができた。	いじめアンケートの内容について、100%確かな方法はない。「学校は聖域ではない」ことを教員が自覚し、学警連携や外部機関との連携を強化する必要性を感じている。生徒指導と生徒支援の両面から対応したいと考える。
	自主自立の涵養	日常生活、各行事を通じて自主自立の精神が育つ活動を支援する。学校行事をできるかぎり実施して、生徒同士が交流できる場を設ける。	B	生徒会を中心とした行事運営を目指しているが、小・中学校生活がコロナ禍の生徒による企画運営能力、積極的な議論を交わす環境を構築するには、教員による相当なテコ入れが必要と感じている。伝統にとらわれず、今の時代の最先端を進むような奇抜な発想があってもよいのではないかと考える。	目的を達成するための目標を具体化したい。最終的に折衷案を提示するような議論では意味がないため、徹底した対話と議論を行い、ハイクオリティな学校行事を目指したい。チームワークと計画性、さらに実行力が伴うような生徒を育てたいと考える。
	安心できる居場所づくり	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒理解を深め、心の健康課題の早期発見と早期対応を行う。</li> <li>相談窓口の周知を図る。相談しやすい場の提供と相談対応。</li> <li>心の課題を学年や関係職員と共有し、組織的に対応を検討する。支援体制を充実させる。</li> <li>学校、キャンパスカウンセラー、医療、福祉等の関係機関との連携。</li> </ul>	A	入学時の健康相談により、学校生活への不安や健康課題、配慮事項等を共通し、安心して高校生活をスタートできる支援体制を整備した。学校行事前後では、養護教諭による健康相談、教職員による教育相談、カウンセラーによるカウンセリング等により、安心できる環境の整備に努めた。職員に対しては、生徒理解を深める研修や委員会を複数回実施し、個々の生徒支援について協議を重ねた。これらの結果、心身の回復や不登校傾向の改善が認められた生徒がいるが、依然、心身の不調生徒もみられる。	取組を引き続き継続する。安心できる居場所づくりにつながると考えられる。あらゆる教育活動の場での健康観察、長期休業明けや学校行事前後の健康観察ポイント、異変やSOSを察知した際の対応や組織的な支援を職員で共通理解する。併せて、専門家や関係機関との協議及び研修を実施し、生徒理解を深める。個々の生徒あるいは全校生徒に対する教育的支援を提供する。相談機関、健康相談、教育相談、カウンセリングの積極的な案内を行う。生徒の活躍する場を提供し、安心できる居場所づくりに努める。
	健康管理能力の向上	<ul style="list-style-type: none"> <li>健康課題の把握</li> <li>健康課題に応じた保健指導、健康相談</li> <li>学校医、主治医、学校薬剤師、関係機関との連携。</li> <li>学校生活管理者等の保健管理、保健指導、健康相談。</li> <li>学校感染症対策</li> <li>学校衛生管理及び学習環境の維持</li> <li>健康管理や感染症に関する情報の発信、知識や態度、行動の育成</li> </ul>	B	保健調査や健康診断の結果から管理が必要な生徒を把握した。当該生徒に対しては、健康相談や治療勧告等により自己管理を促した。職員間では、生徒の健康状況について共通理解を図り、学校教育活動全体を通して健康管理に努めた。応急処置や救急処置等の際には、災害予防や受傷後の自己管理等について保健指導を実施した。生徒保健委員会活動では、衛生管理、応急処置、感染症や熱中症予防等について啓発活動を行っている。課題は、寝不足等の生活リズムの乱れが原因とされる体調不良が多い。	今年度の取組を継続するとともに、健康管理には生活リズムの調整が重要であること、特に、睡眠と健康との関係性を重視した健康教育を充実させる。生徒による保健委員会活動をさらに活発化させ、学校全体で健康管理能力の向上を目指した健康教育活動を充実させる。個々の健康管理能力の底上げを目指す。
学校危機管理体制及び危機対応力の向上 学校セーフティプロモーションの推進	<ul style="list-style-type: none"> <li>危機管理体制及び危機管理マニュアルの見直しと改訂</li> <li>危機対応研修・訓練(シミュレーション訓練)の実施</li> <li>危機対応や安全管理に関する情報の発信</li> <li>保護者、関係機関、地域等と協働した危機対応への取組実施</li> </ul>	A	危機管理マニュアル(保健)の見直しを実施した。危機的な状況を想定したシミュレーション訓練兼職員研修を実施。事前指導、訓練内容、事後の反省等について、生徒、職員、育友会、専門機関と協議し、改善を行っている。通常避難に加えて担架や車椅子による搬送、視覚障害者の護送避難を実施している。個々の役割や組織対応を再確認及び検討する機会となっている。	引き続き、危機管理マニュアル(保健)の見直し、危機的な状況を想定したシミュレーション訓練兼職員研修を行う。生徒、職員、育友会、専門機関と協議し、改善を図る。学校セーフティプロモーションの確立に努める。	

令和7年度 兵庫県立加古川西高等学校 各部・学年の総括

	本年度の目標	目標実現のための具体的な取り組み	自己評価 A:できている B:少しできている C:あまりできていない D:できていない	今年度の振り返り (各目標に対する評価に対して、その成果・課題)	次年度に向けた改善策
進路指導部	【重点目標】 各学年・教科・部署と連携を図り、3年間を見据えた進路指導を行う。	進路部会を中心として、進路指導部と各学年、そして各学年間での共通理解を深める。またキャリアサポートやキャリアノートなどを活用し、進路選択や進路実現に向けた進路指導を行う。	B	各学年と連携を図り、キャリアナビや学びみらいPASSなどの進路実現に向けた新たな取り組みを始めることができたが、キャリアパスポートやキャリアノートの活用に関しては、十分とはいえなかった。	新たに採用したコンテンツと進路結果との関係性や、効果的な活用方法について工夫していく。キャリアパスポートの実践事業2年目を迎え、小中高の連携を踏まえた活用を学年の協力のもと実践していく。
	それぞれの学年に応じた講演会や説明会を実施することで、進路実現に向けての意欲、主体性を高める。	1年は文理選択、2年は大学の学部学科の内容、3年にはそれぞれの進路目標に応じた入試情報等に関する講演会を実施する。また、キャリア教育も随時実施する。(看護系・教育系・法学系)	A	学年と連携を図りながら、学年ごとに時機を考慮した講演会や進路希望に応じた情報提供の場を設定することができた。	生徒が主体的に自己理解をし、興味関心に基づいた進路選択や学問研究の場としての大学選択をおこなうことができるようにする。
	学校と保護者が一体となって生徒の進路意識向上を図る。	保護者対象の進路講演会や説明会を実施するとともに、通信、集会(説明会)等を通じて生徒・保護者への情報提供を行う。	B	進路講演会や説明会などを通して、最新の進路情報を生徒や保護者に提供できた。	web出願の増加や、外部模試のweb申込などが増加しているため、生徒個人が手続きをする必要がある。ミスや漏れがないように、適切な時期に必要な情報を提供できるようにしていく。
	高大接続改革(大学入学者選抜改革)および新学習指導要領に基づく入試の対応を図る。	大学入学共通テスト4年経過の検証および対策、新科目および入試の情報を収集・整理し、職員研修や生徒への説明・指導等の対応を図る。	B	今年度から共通テストがweb出願に変更され、事前登録や受験科目・支払の確認など教員負担が増加した。適宜情報を学年と共有しながら出願から受験までは特に問題なく進めることができた。	外部模試や共通テスト出願など、教員負担が増加しているため、業務の効率化が図れるところは工夫をしていく。
第1学年	【重点目標】 「三兎を追う」を学年目標とし、高いレベルでの文武両道を目指す西高生としての誇りと自信を持つ生徒を育成する。	「学業」・「部活動」・「学校行事等の各自の重点活動」の三羽の兎を、妥協せず各自のペースで追いかけることのできる生徒を育成する。そのために、手帳を活用しながら、時間の使い方について管理・工夫をし、健全な日常生活のルーティンや学習習慣の確立を目指す。部活動や各行事に積極的に参加し、考査や模試ごとに振り返りを促し、自分のポートフォリオを作成させる。	B	「学業」・「部活動」・「学校行事等の各自の重点活動」の三羽の兎を、妥協せず各自のペースで追いかけることに対しては、それぞれの理想と実際の取り組みや結果との差を感じている生徒が多かった。短期目標・中期目標・長期目標がそれぞれの部門で明確になっていない生徒が多いので、日ごろから目標設定の重要性を伝えていきたい。	2年生になると、すべての場面で生徒の中心になって活動することが増えるため、各部門での目標設定を数値化することでより一層明確にし、達成するための取り組み方、時間の使い方を確立させたい。そのために朝のSHRの時間を有効に活用したり、二者面談を密に行ったりしながら生徒の意欲の向上に努めたい。
	基礎学力の定着を図り、学ぶことの楽しさ・深さを感じさせる。	準備→授業→復習という授業中心の学習習慣を身につけさせる。集中力を身に付けるため、朝のSHRで集中カトレーニングを行う。小テストなども活用し、主体的に学習に取り組むことのできる環境を整える。学ぶことで成長を実感できるような機会を増やす。	A	準備→授業→復習という授業中心の学習習慣の確立に取り組み、小テストなどを活用しながら学習リズムを整えた。集中力を身に付けるため、朝のSHRで集中カトレーニングを行った。その結果、着実に学習習慣が身につつき、安定した成果が見られた。3学期には互いに教えあう教室を設置し、相互伸長と学習意欲の向上を図った。	国・英については、引き続き小テストを週1回実施し、学習のリズムを整える。授業を中心とした取り組みは継続しつつ、2年後半からは、応用力も養うような授業や課題を考えていきたい。1年3学期から始めた互いに教えあう輪を広げ、各クラスで教えあえる雰囲気を作りた
	自己肯定感を高めるとともに他者と協働できる明るく活力のある集団づくりを意識させる。	LHR、部活動、探究活動、学校行事などを通して、互いに協働して目標を達成したり、何かを成し遂げる機会を増やすことで自己肯定感の向上を目指す。共に信頼感をもって前向きに目標に向かって活動しようとする態度を育てる。	A	部活動や文化祭・体育大会などの学校行事を通じて、主体的に取り組み他者と協働し目標を達成しようとする態度を育てた。また、各自の得意分野を生かすことのできる多様な内容の学年行事を行うことで、自己の能力を発揮し、信頼感をもって前向きに取り組むことで明るく活力のある集団となった。	部活動・学校行事・HR活動において中心学年である自覚を持ち、主体性を持って行動するように促す。修学旅行に向けて、生徒が中心となって行動できるように、普段の学校生活から、集団における役割・規律を認識させる。
	保護者との連携を密に図りながら、より深い生徒理解に努める。	学年通信やHP、スクリーン等を利用して学校生活の様子を保護者に伝えると共に、保護者会や三者面談を通じて双方向のコミュニケーションを円滑に行い、相互理解に努める。	A	気軽に相談できる雰囲気を作り、保護者との連絡をできるだけ密にとるようにした。また月1回の学年通信で全体の様子を伝えることができた。Classroomやスクリーンを活用し、お互いの負担を減らしつつ、必要な時は電話連絡等の直接的な会話を通じて、保護者と連携を深めることが出来た。	学年通信を月1回のペースで発行するとともに、学年のHPで行事などの様子を伝えるようにする。また保護者との連絡を密にし、三者面談などを通して双方向のコミュニケーションを円滑にするよう努める。

令和7年度 兵庫県立加古川西高等学校 各部・学年の総括

	本年度の目標	目標実現のための具体的な取り組み	自己評価 A:できている B:少しできている C:あまりできていない D:できていない	今年度の振り返り (各目標に対する評価に対して、その成果・課題)	次年度に向けた改善策
第2学年	自主・自律を重んじ、主体的に行動できる人間を目指し、学校生活を送る。	「今未来手帳」の活用を促し、目標を立てさせ、学習・生活習慣の確立を図る。自己を振り返り、反省点を活かして向上に努める機会を多く設ける。	B	2年生になり、日々あわただしい生活を送る中で、学習習慣が確立できていない生徒に対して今後どのように改善させていくかが課題である。	3年生を迎えるにあたって、生徒自身の自己管理はさらに必要になってくる。担任と生徒の二者面談を通して、一人一人の生徒に意識を持たせていきたい。また、自己肯定感を上げ、主体的に行動できるように導きたい。
	進路実現に向けた基礎的な学力の定着を図り、目標に向かって努力する姿勢を育む。	授業を中心とした学習を促し、予習・授業・復習のサイクルを確立させる。より幅広い選択肢から、進路目標を設定させ、達成に向けて自主的に学習する姿勢を養う。	A	授業を中心とした学習習慣に、多くの生徒が慣れてきていると思う。今後は各自の進路実現に向けて、どのように取り組むか、具体的に考え取り組ませていく必要がある。	引き続き授業を中心とした、学習習慣を継続させながら、進路指導部と連携し、進路実現に向けて、より具体的な指導方法を考えていきたい。進路講演なども充実させていきたい。
	<b>【重点目標】</b> 生徒が主体となって、向上できる集団を目指す。	学校行事や探究の時間を含めた教育活動を通して、一人一人の生徒が活躍できる場を設ける。他者を気遣いながら、チーム78回生の一員として何ができるかを考えて行動する姿勢を養う。	A	修学旅行、文化祭などの学校行事で、生徒たちが主体的に考え、行動する姿が見受けられた。79回生Familyとして頑張ろうという意識が根付いてきていると感じる。今後はより多くの生徒が活躍できる環境を作っていきたい。	最高学年として、生徒主体で行事が進められるように促していく。チーム79回生として、受験期も乗り越えられるよう、意識させていきたい。様々な生徒が活躍できるように、学年団で声かけを行っていきたい。
	保護者との連携を図りながら、より深い生徒理解に努める。	定期的に二者面談・三者面談を行う。学年通信やHP等を通じて学校の情報や生活の様子を保護者に伝える。7月・10月に保護者会を開催し情報共有を図り、相互理解に努める。	A	三者面談、保護者会などを通じて意見交換の場を設けることができた。特に10月の保護者会には多数の保護者が出席された。月1回の学年通信や、スクリーンを通して、必要な情報共有ができたと思う。	より丁寧な三者面談を実施する。保護者会などで、具体的な進路情報提供ができるようにしたい。また、学年通信やスクリーンを通して情報共有をしていきたい。
第3学年	基本的な生活習慣の徹底を図らせ、心身ともに健康で充実した高校生活を送らせる。	日々の生活の充実感・達成感の向上に向け、スケジュール管理や振り返りを大切にしよう声掛けをする。	B	昨年度に比べると、受験生ということもあり、スケジュール管理や振り返りができるようになった。3学期の欠席の多さが課題である。体調管理も含め、学校に来る意義を考えさせておく必要がある。	多くの情報から自分に必要な情報を選択して取得し、管理していく能力は、3学年において必須である。その重要性を早くから意識づけることが大切である。受験を迎える3学期の欠席が多くなることについては、保護者への意識づけも必要である。
	進路実現に向けて、基礎事項を徹底し、発展的な学習にも意欲的・継続的に最後まで努力する姿勢を育む。	授業に加えて補習講座・個別指導などを数多く設定し、時機を図りながら提供する。生徒の学力実態と希望進路に応じた内容になるよう教材を精選し、意欲をもって継続的に学習に取り組める環境を提供する。	A	授業の中での基礎の確認、応用力を養う働きかけができた。個々の進路実現に向けて、各自が意識を高く持って学習に取り組む環境づくりができていたと思う。	基本事項を意識する学習は、進路実現に向けて必須である。小テストや定期考査を大切に、自分で振り返って復習する姿勢を身につけさせたい。
	<b>【重点目標】</b> 自己実現にむけて、仲間と共に励ましあいながら、何事も最後までやり切ろうとする精神力を育む。	授業、LHR、行事、部活動等のすべての教育活動で最大限の自己表現ができるよう、振り返りや改善策を考える機会をつくる。最後の1年を大切に過ごせるよう声掛けをし、何事も仲間との信頼感をもって達成させる。	A	行事などにおいては、チームで全力を出してやり切る姿勢が見受けられた。仲間とともに切磋琢磨しながら高めあう姿が見られるようになった。授業の中でも互いに教えあい、励ましあいながら学習効果を上げていた。	チームを常に意識させることが大切である。自己実現のためにも、最終学年すべての場面において、仲間とともに全力を出し切るように励ますことが大切である。
	保護者との連携を図り、より深い生徒理解に努めながら、卒業と進路実現をめざす。	学年通信等を通じて学校の情報等を保護者に明確に伝える。定期的な二者面談・三者面談、5月・10月の保護者会等を開催し、進路についての情報共有を図りながら、個々に応じた丁寧な進路指導に努める。	A	保護者会を通じて丁寧な情報提供ができるように努めた。また、できる限り連絡を密にとり、保護者や生徒本人の意向を確認した。二者面談も適宜行い、教員でも生徒個人の情報を共有し、様々な視点から進路指導ができるように心がけた。	外部講師の講演などを取り入れながら、実情にあった情報提供ができるように保護者会を工夫する。二者面談も適宜行い、学年全体で進路指導ができる体制を整える。